

引き揚げの記憶 後世に

福岡県柳川市在住で元大阪府東大阪市長の松見正宣さん(73)が3歳だった70年前の厳寒期、父に背負われ、身重の母と共に、現在の北朝鮮から決死の脱出をした体験を本にした。タイトルは「北緯三十八度線、故国の土を踏むまでは」。引き揚げから70年の節目の今年、出版を思い立った。「戦争を知る世代には『記憶』として、知らない世代には『記録』として読み継いでもらえたら」と期待する。

柳川市の松見さん出版



70年前の引き揚げ時に着せられていた防寒服を手にする松見正宣さん

「日韓相互理解の一助に」

松見さんは太平洋戦争中の1942年、京城(現ソウル)で生まれた。父正直さんは熊本県山鹿市出身で朝鮮電業の社員、母宣子さんはソウル生まれの日本人。終戦時に一家3人は北朝鮮東部の興南にいた。現地の日本人の多くは汽車で海岸線沿いを南下する経路で脱出を図ったが、正直さんは「ソ連軍に捕まる恐れが高く危険」と判断。半島中部の山道を約400キロ歩き、38度線を越えてソウルを目指すことにし

た。時期はあえて、シラミや感染症の発生を抑えられ、野生の熊も冬眠する厳寒期にした。

1月31日。宣子さんは松見さんの妹を身ごもり、既に臨月だった。雪道を歩いて38度線を越えるのに17日間を要した。朝鮮人の集団に取り囲まれて殴られたこともあったが、宣子さんが妊娠中と気付いた年配の女性が止めてくれたという。

松見さんは「私が覚えているのは、おなががすいて雪のおにぎりを食べたことと、父の背中『どんぐりころころ』を歌っていたことだけ」。しかし、脱出の一部始終は正直さんの随筆に残されており、松見さん

が歴史状況などを調べ直して再構成し、執筆した。

松見さんは大学を出た後、NHKに就職し、韓国を50回以上訪問。東大阪市長時代には、日韓交流に特に力を入れたという。現在は、祖父の出身地である柳川市に移り住み、執筆や講演活動をしている。

本を書き終え、「一家が無事に引き揚げられたのは、たくさんの朝鮮の人々の好意のおかげ」と再認識したという。いくつもの近道を教えてくれたハラボジ(おじいさん)、大切なジャガイモを分けてくれたハルモニ(おばあさん)。手元には、道中で保安署(警察署)の朝鮮人責任者が手書きしてくれた一家の素性を示す証明書も残っている。「ハイトスピーチの横行など、日韓は不幸な時代にあるが、歴史認識を共有し分かり合うことの大切さに気付いてほしい」と願う。

新書判、114頁、756円。インターネット通販の「アマゾン」で購入できる。

(編丸哲雄)



伊川保安署熊灘分署長が持たせてくれた手書きの証明書。「右の者、本分署で検査したが異常なしと証明する」と、漢字にハングル文字交じりで書かれている